

# *Jane Eyre*批評史における *The Life of Charlotte Brontë*

杉 村 藍

## I はじめに

Elizabeth Gaskell (1810-65)の執筆した *The Life of Charlotte Brontë* (1857) (以下 *Life* と省略する) は、その高い文学性から *The Life of Samuel Johnson* (1791)、*Memoirs of the Life of Sir Walter Scott* (7 vols, 1837-8) と並び称される勝れた伝記文学のひとつとなっている。まとまった Charlotte Brontë (1816-55)伝としては最初のもので、Charlotteの伝記的、文学的研究の資料として重要であることはいうまでもない。Mrs. Gaskell自身は、伝記的事実を記すことに集中するため、'I am not going to write an analysis of a book with which every one who reads this biography is sure to be acquainted'<sup>1</sup> と述べ、Charlotteの作品についての批評は極力避けている。そのため、後の作品批評のなかに彼女の直接的な影響を指摘することは難しい。しかし、それだけで *Life* と Charlotteの作品批評との関わりをまったく否定することはできない。事実、19世紀から20世紀にかけて出版された研究書のほとんどすべての Bibliographyには、必ず *Life* が挙げられている。Brontë研究者は誰もが夫人の *Life* をその研究の基礎に据えているといっても過言ではない。そこで小論では、Brontë研究においてこのような重要な位置を占める Mrs. Gaskellの伝記が、Charlotteの代表作 *Jane Eyre*の批評に与えた影響を跡づけてみたい。今回は、*Life*の出版直後から1945年までのおよそ90年間を扱う。

## II *Life*以前の *Jane Eyre*批評

ここでまず、*Life*出版以前の *Jane Eyre*批評の動向を簡単にまとめておこう。*Jane Eyre*は出版後まもなく空前のベストセラーとなり、いわゆる *Jane Eyre*

fever'を巻き起こした。初版は6週間で売り切れ、数週間後に出た第二版も瞬く間に売れた。<sup>2</sup> 作品の売れ行きよさに舞台化の話も出たほどであった。<sup>3</sup> こうして、1847年10月に出版されて以来、わずか6か月の間に次々と第三版まで版を重ねた。<sup>4</sup>

*Athenaeum*, *Examiner*, *Blackwood's Magazine*をはじめ多くの新聞、雑誌が、このほとんど無名の作家が書いた小説を取り上げた。書評はイギリス本国だけではなく、アメリカ、フランスの雑誌にも掲載された。<sup>5</sup> すでに文壇で活躍していた人々もこの小説に強く惹きつけられ、W. M. Thackeray, J. G. Lockhart, G. Eliotなどがそれぞれ手紙のなかで*Jane Eyre*に言及している。

出版当時の*Jane Eyre*批評は、概して好意的なものが多い。それらがまず注目しているのは作品の斬新さ、獨創性である。貧しく不器量な女性の半生をテーマにすること自体が、Silver-fork<sup>6</sup>に代表される、この頃の上流社会を舞台にした極端に感傷的な小説の風潮からは考えられないことであった。また、登場人物や背景となる自然が生き生きと描かれていることから、人物創造のみごとさや自然描写のすばらしさも繰り返し指摘されている。

こうして*Jane Eyre*は順調なスタートを切ったが、しかし突然売れ行きが落ち込み、版が重ねられることもなくなる。この急激な変化は、1848年12月、*Quarterly Review*に掲載された*Jane Eyre*批評のためであった。匿名で批評を執筆したElizabeth Rigby (1809-93)は、*Jane Eyre*を激しく攻撃している。

Jane Eyre, in spite of some grand things about her, is a being totally uncongenial to our feelings from beginning to end .... the impression she leaves on our mind is that of a decidedly vulgar-minded woman — one whom we should not care for as an acquaintance, whom we should not desire for a relation, and whom we should scrupulously avoid for a governess.<sup>7</sup>

*Jane Eyre*に対する非難は、Rigby以前にもなかったわけではない。しかし、彼女の批評が他と異なり、また小説の売れ行きさえ左右するほどの影響力をもったのは、彼女がヴィクトリア朝の道德観を批評の基礎に置いたためであった。Rigbyは、小説と当時の社会的、道德的規範との食い違いを激しく攻撃している。その頃、道德と規律が何よりも尊ばれ、女性は「家庭内天使」という別名を与えられて従順に生きることを要求されていた。こうしたヴィクトリア朝社会において、その枠組みは絶対的であり、それを逸脱することは、

社会的落伍者、失格者を意味していた。自ら男性に自分の感情を打ち明けるヒロイン、放蕩の末に重婚を企てるヒーローなど、*Jane Eyre*には当時の常識では考えられない不道徳な要素がたくさん盛り込まれていた。Rigbyが書評のなかで用いた‘vulgarity’, ‘coarseness’, ‘heathen’ といった言葉は、*Jane Eyre*が社会に受け入れられるべき作品ではないということをはっきりと示していた。Charlotte自身は‘The lash of the “Quarterly,” however severely applied, cannot sting<sup>8</sup>’と述べ、批評そのものに対する軽蔑から *Quarterly Review*を一顧だにしないという姿勢を示している。しかし、敬虔なキリスト教徒であらうとつねに努めてきた牧師の娘Charlotteにとって、この書評はやはり痛烈なものであった。彼女は次作 *Shirley* (1849)に‘A Word to the “Quarterly”’という抗議文を付けることを思いついた。この計画は結局実現しなかったのであるが、こうした態度からもCharlotteにとって *Quarterly Review*が<sup>9</sup>いかに納得のできない不当なものとして映っていたかが解る。

Rigbyの批評はヴィクトリア朝においてこそ意味があったものであり、純粋な文学批評でないことはいずれ指摘されるようになる。しかし、当時はRigbyの非難は*Jane Eyre*にとって致命的なものであった。それまでは順調に版を重ねていたにもかかわらず、Rigbyの批評以後9年ほど*Jane Eyre*の出版が途絶えたことが<sup>9</sup>、その影響の甚大さの一端をものがたっている。

### III *Life*の出版

こうした状況のなか、1857年Mrs. Gaskellの*Life*が<sup>9</sup>出版された。Charlotteの実際の友人であり、彼女自身の口からその生涯の物語を聞いたMrs. Gaskellは、実に最適の伝記作者であった。伝記執筆の直接の契機となったのは、Charlotteの死後間もなく彼女の父Patrick Brontëから執筆の依頼を受けたためであったが、Gaskell自身依頼の手紙を受け取るまでもなくCharlotteの生涯について書いてみたいという考えをもっていたらしい。<sup>9</sup> 彼女は早速ヨークシャー、ブリュッセルなどへ直接赴き綿密な調査を行う。そして二年たらずのうちに伝記を執筆、出版しており、それは非常に迅速な作業であった。<sup>10</sup> このように伝記の決定版が早く確立されたことは、Brontë研究を促進するうえで非常に大きな効果があったと思われる。

では、*Life*が<sup>9</sup>*Jane Eyre*に与えた具体的影響を考察していこう。その一つは、まず出版直後に現われている。それは、第二の‘*Jane Eyre fever*’を巻き起こしたことである。*Life*が<sup>9</sup>出版されたこの年、*Jane Eyre*の第4版が<sup>9</sup>ほぼ9年ぶ

りに出版されたのである。*Life*によってCharlotteへの関心が高まり、再び彼女の作品が注目されるようになった。最初の*Jane Eyre*ブームを消し去ったのはElizabeth Rigbyであり、その影響はこの頃もずっと続いていた。彼女の*Jane Eyre*批判を打開する最初の決定的変化をもたらしたのが、他ならぬMrs. Gaskellであったのである。自らもヴィクトリア朝に生きた夫人は、誰よりもRigbyの批評の恐ろしさを知っていたといえよう。彼女はその非難から*Jane Eyre*を、そしてCharlotteを救い出さなければならないと考えていた。<sup>11</sup> それは、*Life*のなかでヨークシャーの独特の地域性、父Patrickの奇癖などに繰り返し触れることによって、Charlotteの育った環境の特異性を印象づけようとしていることから窺える。

#### IV 1860年代～世紀末

しかし、*Life*によって第二の '*Jane Eyre fever*' がもたらされた後、次第にBrontë姉妹への関心は薄れていってしまう。実際、1860年代から世紀末にかけては、Brontë関係の批評、論文は極端に少なくなる。これは、Rigbyの批評の基礎をなしていたヴィクトリア朝の道徳観のためであったと思われる。この時代を支配する思想が、Rigbyの批評を結果的に支持するという構図が出来上がってしまったのである。むしろ、こうした状況において '*Jane Eyre fever*' をもたらし得たGaskellの偉大さにこそ、わたしたちは注目しなければならないであろう。

けれども、この時期にBrontëの研究文献が皆無であったわけではない。出版された少数の研究書のなかには、批評史に残る著作が登場する。その一つがT. Wemyss Reid (1842-1905)の*Charlotte Brontë: A Monograph* (1877)である。これはGaskellの*Life*に次いで執筆された第二の本格的なCharlotte Brontë伝である。Reidは序文において、Gaskellの功績を讃える一方、それをさらに完璧なものとする必要をとなえている。続く第1章 'Introductory' もGaskellの*Life*に当てられており、彼がCharlotte Brontë伝を執筆するにあたっていかに*Life*が大きな刺激となり、また彼自身Gaskellを強く意識していたかが判る。

しかし、伝記という形式をとっているためか、Gaskellの場合と同じようにReid自身が*Jane Eyre*について論じている箇所は少なく、出版当時の読者の反応や主だった批評などについての記述がほとんどである。また、Rigbyの批評を排斥するため、Charlotteの生涯の悲劇性を強調することによって、Gaskell

と同様の *Jane Eyre* 擁護論を展開しているにすぎない。

しかし、Reidの最大の功績は、*Jane Eyre*をはじめ姉妹の作品への関心が消えかけたこの時期に、敢えてCharlotteの伝記を世に問うたことである。‘I have expressed my conviction that the comparative neglect from which “Jane Eyre” and its sister-works now suffer is only temporary.’<sup>12</sup>と述べているところからも明らかなように、Reidがこの伝記を執筆したのはBrontë研究の不毛時代であり、姉妹の作品研究が沈滞していた時期であった。しかし彼はこうしたBrontë離れが一時的であることを確信し、人々の心に姉妹の記憶を呼び起こそうとしたのである。Reidの試みは、Brontë熱が冷めた時代にあつて彼女らの魅力を知らしめようとした貴重な努力であつたといえよう。しかも、彼がこの伝記を執筆しようとした動機のなかで、Gaskellの *Lives* が大きな位置を占めていたことを忘れてはなるまい。

Gaskellの *Lives* がReidの *Charlotte Brontë* 執筆を刺激したように、Reidの伝記もまた新しいBrontë論を誕生させた。それがA. C. Swinburne (1837-1909) の *A Note on Charlotte Brontë* (1877) である。*Charlotte Brontë* の前身である *Macmillan's Magazine* のReidの評論に刺激を受けたSwinburneは、<sup>13</sup> 自らもCharlotteの才能を輝かしく謳いあげている。しかし、彼の *Jane Eyre* 論でもっとも注目しなければならない点は、Rigby批評の扱い方にある。彼は *Quarterly Review* の批評に触れたあとで次のように述べている。

So gross and grievous a blunder would entail no less than ruin on a mere novel of manners; but accuracy in the distinction and reproduction of social characteristics is not the test of capacity for such work as this [*Jane Eyre*]. That test is only to be found in the grasp and manipulation of manly and womanly character.<sup>14</sup>

GaskellやReidもRigbyの攻撃から *Jane Eyre* を擁護しようとしていたことはすでに述べた。しかしながら、彼らはRigbyの非難をCharlotteの育った環境のせいにしたたり、あるいは彼女のもつ率直さ、純粹さのためであると問題をすり替えるだけであつた。彼らがこのような手段に訴えてまで *Jane Eyre* を必死に擁護しようとしたのは、作者に深い愛情を寄せていたためばかりではなく、Rigbyの指摘の正当性を基本的には認めていたからではないであろうか。まったく根拠のないものとみなしていれば、敢えてこのような弁護は試みなかったはずである。その意味で、GaskellとReidはRigbyと同じヴィクトリア

朝の思想的背景をもっていたといえる。

しかし、Swinburneは違っていた。彼はRigbyの指摘する欠点を欠点と認めたくなくて、その重要性を否定しているのである。Rigbyの批評は*Jane Eyre*という文学作品を、ヴィクトリア朝の厳しい道徳観を背景に社会的、道徳的レベルでの議論に押し下げる働きをしていたのである。SwinburneはRigbyにとらわれることなく、その意見を超越して、批評の視点を真に文学的な要素に向けようとしている。Swinburneの著書は、*Jane Eyre*研究を、本来の文学批評に立ち戻らせる一大革命だったのである。<sup>15</sup>そしてSwinburneのこの著書が生まれるためにはReidが、そしてまたGaskellがそれぞれ直接、間接になくはならない存在だったのである。Gaskellの*Life*は、ReidとSwinburneをとおり、Rigbyによって葬り去られようとしていた*Jane Eyre*の埋没を防いだのである。

## V 世紀末～1920年代

この頃、*Jane Eyre*批評のあり方には大きな変化が現われる。世紀末を迎えると、それまで社会を支配して来たヴィクトリア朝の道徳観は崩れ始め、Rigbyはその理論的支柱を失うことになった。*Jane Eyre*研究はそれまで、少数の熱心なBrontëファンによる、Rigby批評からの擁護という形で細々と続いていた。しかし、時代の変化とともに弁護の必要がなくなると、*Jane Eyre*はより自由に批評家たちの研究対象となりえた。

また、世紀末から20世紀初頭にかけては、一時代前、ヴィクトリア朝期の文学作品の評価、位置づけの試みが始まっていた。この頃、*The Victorian Age of English Literature* (1892)、*Studies in Early Victorian Literature* (1895)、*Literature of Victorian Era* (1910)といった、ヴィクトリア朝の文学研究や文学史の著作が数多く出版されている。そのなかにはRigby批評から開放された*Jane Eyre*ももちろん含まれていた。

この頃の*Jane Eyre*批評の内容は、小説の出版当時の書評と基本的に違いはない。そうした評論から標準的なものをひとつ引用してみよう。

Readers discovered that here was a thrilling and exciting story in which the characters were so firmly drawn and the descriptive passages so powerful as to show it to be the work of a master hand.<sup>16</sup>

読者の人気を得た要因として、スリリングで好奇心をそそるストーリー、しかも、そこに大家の力量を示すしっかりと描かれた登場人物たち、力強く描写力に富んだ文章がみられることを挙げている。発表当初のような、作品の斬新さに対する驚きこそ少なくともはなくなったが、人を惹きつけるゴシック・ロマンス的な要素と、人物創造、描写にみられるCharlotteの文筆の才とは、出版当初からはほぼ変わらず評価されている点である。この評論の執筆者は、これに続く部分で*Jane Eyre*のもつメロドラマ的な要素を欠点として挙げているが、これも従来と同じ指摘である。

批評内容に発展がみられず互いに似通ったものが多いのには、いくつかの理由が考えられる。まず、この頃は前時代の文学状況を振り返り、作品がどのように位置づけられるかというのが中心課題であったことである。そのため、この時期は批評内容としては前時代の整理を行なったという観が強く、新しいものはほとんど生み出されなかった。また、初の世界大戦を経験し、*Jane Eyre*批評を新たに展開させるだけの精神的余裕もなかったのであろう。しかし、ほぼ同じ解釈が繰り返されることによって、*Jane Eyre*の基本的な特徴や捉え方が定着し、またその文学史的位置づけが確立された。現代にも引き継がれている*Jane Eyre*批評の土台が形作られたのが、この時期だったのである。

文学史的な概論を執筆するのは、ほとんどの場合、Brontë研究が専門ではない人々であった。彼らが作者Charlotte Brontëについて必要な知識を得ようとするとき、その中心的役割を果たすのは、すでにCharlotte Brontë伝の定本として地位を確立していたGaskellの*Life*であった。Rigbyからの擁護論に終始し、質、量ともに貧弱であったそれまでのBrontë研究は、充分な資料を提供してはくれなかった。そのため、批評家たちの目がGaskellの*Life*へと向けられるようになったのはきわめて自然なことであった。*Life*が注目を集めBrontë研究の重要な資料となっていたことは、その頃の批評から容易に知ることができる。多くの批評家が作家の生涯に言及するとき、Gaskellの*Life*を基にしている。直接Gaskellの名を出したり、または*Life*から引用しているものも少なくない。

しかしその一方で、*Life*の印象があまりにも強烈であったため、著者であるGaskellの視点に立ってCharlotte像を構築するという習慣が無意識のうちに根づいてしまった。Gaskellが深い愛情を込めて描いたCharlotteの悲劇的な生涯は、批評家たちの胸に作家への同情を呼び起こし、それが彼等の鑑識眼を曇らせるという場合も生じたほどである。James Oliphantという批評家の

ように、‘She [Charlotte] was a great novelist because she was a noble, heroic woman’<sup>17</sup>と述べ、作家としてのCharlotteの偉大さをその人間の偉大さですべて説明してしまうという極端な例もみられた。

この時期の概論的な*Jane Eyre*論は、*Life*を中心とした伝記研究を基礎としていることから、作家自身と作品とのつながりが強く意識されている。*Jane Eyre*の出版当初にも、主人公Janeを作者自身と重ね合わせて考えた書評はあったが<sup>3</sup>、<sup>18</sup> Charlotteがペンネームを用いていたために作者の性別さえ定かではなかった当時、それはあくまで推測の域を出ないものであった。しかし、この頃の批評家たちには同じ意見を述べるのにも*Life*がはっきりとした確証となってくれた。批評家のなかには、文学者Hugh Walkerのように、‘The Brontës belong to that class of writers whom it is impossible to understand except through the medium of biography.’<sup>19</sup>と述べ、Brontë研究における伝記の重要性を主張する者もいた。作品と伝記との密接なつながりが実証され、Brontëは伝記なくしてはありえないという特徴的な研究のあり方が確立されていった。

文学研究の基盤として伝記が盛んに援用されるようになった背景には、世紀の変わり目に前後して、*Life*を中心とした伝記的研究が発達する環境が整っていったことも大きく影響している。この頃、Charlotteに関係のあった人々の多くが他界し、研究が容易になったのである。例えば、Charlotteの夫A. B. Nochollsが1906年に、ブリュッセル留学時代の恩師C. Hegerが1896年に、その夫人が1890年にそれぞれ世を去っている。Charlotteの父Patrickや、*Life*の記述をめぐって訴訟問題を起こしていたLady Scott, Carus-Wilsonらもすでに他界していた。そのため、伝記的事実を調査し発表するのに直接支障をきたす関係者はほとんど残っていなかったのである。しかし、Charlotteを直接知る人がどんどん少なくなっていくということは、同時に、もはや記録に留めることができず事実が増えていくということでもあった。問題を自由に取り扱えるようになったことにより、伝記研究のテキストとして、またCharlotteの同時代人による記録として、この頃Gaskellの*Life*の価値は改めて認識されたはずである。

## VI 1930年代～1945年

世紀の変わり目から1920年代にかけて*Jane Eyre*批評の基礎が固められると、その後1930年代以降は、それを土台として新しい*Jane Eyre*論の登場をみる。



その一つが初期作品研究である。1933年、F. E. RatchfordがCharlotteの初期作品の一部をまとめた*Legends of Angria*が出版されたのである。<sup>20</sup>Gaskell自身、*Life*のなかで初期作品については触れており、その存在を最初に世に知らしめたのは他ならぬ彼女であった。しかし、Gaskellが簡単に言及するに留まった初期作品を、後にRatchfordが一つの研究分野として提示したのである。この本の出版にともない、さっそく書籍収集家A. Edward Newtonは*Jane Eyre*とこれら初期作品の関係に注目した。

Think of that demure little governess, Charlotte Brontë, without knowledge or experience in the world or in writing, producing such a thriller as *Jane Eyre*! The mystery becomes less mysterious when one discovers that she had been writing for years — ...<sup>21</sup>

Ratchfordはさらに1941年*The Brontës' Web of Childhood*を出版し、初期作品と*Jane Eyre*他、姉妹の小説との密接なつながりを明らかにした。彼女は*Jane Eyre*誕生の経緯を分析し、さらに小説のなかの登場人物や出来事の原型を具体的に初期作品のなかから指摘している。*Jane Eyre*が生み出される背景として初期作品がいかに重要な土台となっていたかが解る。これは、Charlotteの小説を研究するうえで貴重な分野として近年ますますその重要性が認識されている。

このようにBrontë研究の新しい分野が開拓されるのには、*Life*が一つの大きな推進力になっている。Charlotteの直接の友人が書いたものとして、*Life*は絶対的な権威と魅力をもっていた。*Life*が偉大であればあるほど、それを越えるものを生み出したいという研究家たちの熱意は一層煽られた。しかし、Gaskellを越えることは容易ではない。そこで後の研究家たちは、*Life*に描かれていない部分を記述しようと、さまざまな方面へ研究の目を向けるようになったのである。<sup>22</sup>初期作品もまた、そうした分野の一つに挙げられるであろう。Ratchfordの著作は、*Jane Eyre*研究を進めるうえで貴重な第一歩であった。しかも、こうした新しい研究分野を切り開く原動力の一つとして、*Life*は中心的な位置を占めているのである。このように*Life*は、*Jane Eyre*研究の基礎となるだけでなく、新しい研究テーマの誕生をも刺激しているのである。

*Life*はCharlotteの死後まもなく書かれたために、Gaskellの記憶ばかりでなく、Charlotteへの愛惜の情もひととき鮮やかに胸に残っていた。これこそがCharlotteの生涯の悲劇的要素と呼応して伝記の底流を流れ、単なる記録では

なく文学作品とも呼び得る伝記を生み出したのである。人々が*Jane Eyre*をはじめとする姉妹の作品のみならずその生涯に強く惹きつけられたのは、確かに彼女らの生涯そのもののもつ魅力もある。しかしそれだけでなく、人々の心を魅了ししっかりと掴んで離さないのは、Gaskellのこうした執筆態度が大きく影響しているためであると思われる。

*Life*はBrontë文学の研究にはなくてはならないものとしてその地位を確立した。Brontë研究において伝記的研究という分野を確立する最大の礎を築き、他に例をみないほど作品と作者の生涯との関わりが重視される姉妹の研究のあり方は、Gaskellに負うところがあまりにも大きい。Gaskellの*Life*はまた、*Jane Eyre*研究の新しい研究分野の誕生も刺激し、*Jane Eyre*批評を直接、間接に支え、また研究そのものをも新しい方向へと導いているのである。

#### Notes:

- 1 Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*. (Penguin Books, 1985), p. 326.
- 2 K. A. R. Sugden, *A Short History of the Brontës*. (London: Oxford University Press, 1929), p. 45.
- 3 E. F. Benson, *Charlotte Brontë*. (London, New York, Toronto: Longmans, Green and Co., 1932), p. 204.
- 4 第三版の出版は1848年4月。
- 5 アメリカでは*Literary World* (January 20, 1848), *Peterson's Magazine* (March 1848), *Graham's Gentlemen's Magazine* (May 1848), *North American Review* (October 1848), フランスでは*Revue des deux Mondes* (November 1, 1848)などがそれぞれ*Jane Eyre*の書評を掲載している。
- 6 1830年頃のイギリス小説家一派をあらわすのに用いられた語で、上流気取りがその特徴。
- 7 *Quarterly Review*. (December 1848, lxxxiv).
- 8 Charlotte Brontë's letter to W. S. Williams, dated January 2nd, 1949.
- 9 Angus Easson, *Elizabeth Gaskell*. (London, Boston and Henley: Routledge & Kegan Paul, 1979), pp. 135-6.
- 10 先に挙げた*The Life of Samuel Johnson*がJohnsonの死後7年、そして*Memoirs of the Life of Sir Walter Scott*がScottの死後5年から6年にかけて出版されたことを考えると、死後2年のうちに出版された*Life*がいかにかに早いものであったかが判る。

- 11 Easson, p. 127.
- 12 T. Wemyss Reid, *Charlotte Brontë : A Monograph*. (London: Macmillan and Co., 1877), p. 233.
- 13 Swinburne自身はこれを *Spectator* (November 11, 1876) に掲載されていたと記述している (p. 2)。
- 14 A. C. Swinburne, *A Note on Charlotte Brontë*. (London: Chatto & Windus, Piccadilly, 1877), p. 27.
- 15 Swinburneの他にも、*Life*出版直後ふたたび *Jane Eyre* が注目をあびたとき、John Skeltonが純粹に文学的立場から *Jane Eyre* を批評し、Rigbyの指摘の無意味さを説いている (*Fraser's Magazine*, May 1857)。彼の批評は直接 *Jane Eyre* 批評の動向を左右するには至らなかったが、Swinburneの先駆をなしていたといえる。
- 16 Amy Cruse, *English Literature through the Ages*. (London: George G. Harrap & Company Ltd., 1919), p. 498.
- 17 James Oliphant, *Victorian Novelists*. (London: Blackie & Son. Ltd. 1899), p. 65.
- 18 *Christian Remembrancer*. (April, 1848).
- 19 Hugh Walker, *The Literature of the Victorian Era*. (Cambridge University Press, 1910), p. 710.
- 20 姉妹の初期作品は世紀末から今世紀初頭にかけてすでにC. ShorterやT. J. Wiseらの編集によって一部が出版され、また研究の試みも始まっていた。そうしたなかでも、初期作品についてのまとまった著作を世に問うたRatchfordの業績は、この分野の研究を進めるうえで特に大きいものであったといえる。
- 21 A. Edward Newton, *Derby Day and Other Adventures*. (Boston: Little, Brown, and Company, 1934), p. 322.
- 22 例えば、Gaskellが描いていなかった、Patrickの故郷IrelandにおけるBrontë家の祖先、一族に着目したHopkins, *The Father of the Brontës* (1897), Dr. W. Wright, *The Brontës in Ireland* (1893), J. Ramsden, *The Brontë Homeland* (1897)などの研究書が出版されている。